

芥川賞90人の レトリック

彦素 勉編



彦素勉編

芥川賞90人の
レトリック

潮文社

彦素 勉 (ひこそ・つとむ)

昭和2年、京都に生まれる。昭和28年大阪大学文学部フランス文学科卒業後、読売新聞大阪本社に入社。整理部部長、編集局次長を経て、現在、社友。内外の新聞文章の比較研究に携わるほか、大阪コミュニケーション・アート専門学校にて非常勤講師を勤める。

芥川賞90人のレトリック〈新装版〉

平成十二年四月十五日発行

編 者 彦 素 勉

発行者 小 島 米 雄

発 行 所 株式会社 潮 文 社

〒一六二〇八四三

東京都新宿区市谷田町二一三一
電話(〇三)三三六七七一(代表)
振替 〇〇一四〇一七六九一〇七

印刷・埼京印刷 製本・越後堂製本

© Tsumoru Hikoso 2000 Printed in Japan
ISBN 4-8063-1344-0

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

はじめに

「おもしろい試みだと思う。承諾します」

百六人の芥川賞作家（著作権継承者を含む）の方々に本書出版の意図を伝え、受賞作品からの文章の抄出・転載について承諾を依頼した私の手紙に対する最初の返信の文面は、このようなものであった。

レトリックを追うあまり、原作の精神を損なうてはいないか、「これじゃ文学作品の因数分解ではないか」そんな苦情や叱責が寄せられることも覚悟の上の企てであっただけに、幸先のよさを喜んだものだが、反面、すでに故人である第一回受賞者の石川達三氏の作品などについては承諾が得られなかったのは、やむを得ないことであつたと思う。

川端康成氏はその新文章読本の中で、「美しい文章はその作家の芸術的生命が高揚している時、その頂点をみるようである。（略）至芸の老年の文章に劣らず、処女作の稚拙は美しいとも考え

られる。処女作の文章は可能性を持つからであろうか。こみあげる何かを、切なくうたいあげているからであろうか」と語っているが、ここにいう「処女作」を栄光の「芥川賞作品」に置き換え、新人の才能と個性が綺羅星のように一堂に会する、そんな本を出してみたい、というのが本書出版の動機であつた。

ともあれ、ここに受賞作家各氏の承諾を得て九十一編の芥川賞作品の煌く片鱗を集め、レトリックの饗宴に読者をお招きできるのは、嬉しい限りである。巻末には索引として九百三十項目を掲載した。ここに、ご協力いただいた作家諸氏に対し、心からの謝辞を捧げるしだいである。

平成三年十一月

彦素 勉

芥川賞90人のレトリック／目次

芥川賞受賞作品リストを兼ねています
*の作品は本書には収録されていません

昭和十年代

第一回	*石川 達三	蒼氓	
第三回	鶴田 知也	コシヤマイン記	16
	*小田 嶽夫	城外	
第四回	石川 淳	普賢	18
	*富沢有為男	地中海	
第五回	尾崎 一雄	暢気眼鏡 他八編	20
第六回	火野 葦平	糞尿譚	22
第七回	中山 義秀	厚物咲	24
第八回	中里 恒子	乗合馬車 他	26
第九回	長谷 健	あさくさの子供	28
	*半田 義之	鶏騒動	
第十回	*寒川光太郎	密獵者	

第十二回	櫻田 常久	平賀源内	30
第十三回	多田 裕計	長江デルタ	32
第十四回	芝木 好子	青果の市	34
第十六回	倉光 俊夫	連絡員	36
第十七回	石塚喜久三	纏足の頃	38
第十八回	*東野邊 薫	和紙	
第十九回	八木 義徳	劉廣福	40
	小尾 十三	登攀	42
第二十回	清水 基吉	雁立	44

昭和二十年代（20—23年の4年間休止）

第二十一回	由起しげ子	本の話	46
	小谷 剛	確証	48
第二十二回	井上 靖	闘牛	50
第二十三回	辻 亮一	異邦人	52

第二十五回 石川 利光 春の草 54

* 安部 公房 壁

第二十六回 * 堀田 善衛 広場の孤独・漢奸

第二十八回 * 五味 康祐 喪神

松本 清張 或る「小倉日記」伝 56

第二十九回 * 安岡章太郎 悪い仲間・陰気な愉しみ

第三十一回 吉行淳之介 驟雨 58

第三十二回 小島 信夫 アメリカン・スクール 60

庄野 潤三 プールサイド小景 62

昭和三十年代

第三十三回 遠藤 周作 白い人 64

第三十四回 石原慎太郎 太陽の季節 66

第三十五回 近藤啓太郎 海人舟 68

第三十七回 菊村 到

硫黄島……………70

第三十八回 開高 健

裸の王様……………72

第三十九回 大江健三郎

飼育……………74

第四十一回 斯波 四郎

山塔……………76

第四十三回 北 杜夫

夜と霧の隅で……………78

第四十四回 三浦 哲郎

忍ぶ川……………80

第四十六回 宇能鴻一郎

鯨神……………82

第四十七回 川村 晃

美談の出発……………84

第四十九回 後藤 紀一

少年の橋……………86

第五十回 河野多恵子

蟹……………88

第五十一回 田辺 聖子

感傷旅行……………90

第五十一回 柴田 翔

されどわれらが日日……………92

昭和四十年代

第五十三回 津村 節子

玩具……………94

第五十四回	高井 有一	北の河……………	96
第五十六回	*丸山 健二	夏の流れ……………	
第五十七回	大城 立裕	カクテル・パーティ……………	98
第五十八回	柏原 兵三	徳山道助の帰郷……………	100
第五十九回	大庭みな子	三匹の蟹……………	102
	*丸谷 才一	年の残り……………	
第六十一回	庄司 薫	赤頭巾ちゃん気をつけて……………	104
	*田久保英夫	深い河……………	
第六十二回	清岡 卓行	アカシヤの大連……………	106
第六十三回	古山高麗雄	プレオー8の夜明け……………	108
	吉田 知子	無明長夜……………	110
第六十四回	古井 由吉	杏子……………	112
第六十六回	李 恢成	砧をうつ女……………	114
	東 峰夫	オキナワの少年……………	116
第六十七回	宮原 昭夫	誰かが触った……………	118

第六十八回

畑山 博
郷 静子

いつか汽笛を鳴らして……
れくいえむ……
ベティさんの庭……

122

第六十九回

山本 道子
三木 卓

鶏……
……
……

124

第七十回

森 敦

月山……
……
……

126

第七十二回

野呂 邦暢
阪田 寛夫

草のつるぎ……
土の器……
……

130

日野 啓三

あの夕陽……
……
……

132

昭和五十年代

第七十三回

*林 京子

祭りの場

136

第七十四回

中上 健次

岬……
……
……

138

岡松 和夫

志賀島……
……
……

138

第七十五回

*村上 龍

限りなく透明に近いブルー

138

第七十七回	三田 誠広	僕って何……………	140
	池田満寿夫	エーゲ海に捧ぐ……………	142
第七十八回	宮本 輝	蜷川……………	144
	高城 修三	榎の木祭り……………	146
第七十九回	高橋三千綱	九月の空……………	148
	高橋揆一郎	伸子……………	150
第八十一回	重兼 芳子	やまあいの煙……………	152
	青野 聰	愚者の夜……………	154
第八十二回	森 禮子	モッキングバードのいる町……………	156
第八十四回	尾辻 克彦	父が消えた……………	158
第八十五回	吉行 理恵	小さな貴婦人……………	160
第八十八回	加藤 幸子	夢の壁……………	162
	唐 十郎	佐川君からの手紙……………	164
第九十回	笠原 淳	奎二の世界……………	166
	高樹のぶ子	光抱く友よ……………	168

昭和六十年代・平成年代

第百五回

辺見 庸

自動起床装置

..... 194

荻野アンナ

背負い水

..... 196

索引

..... 206

次の回は受賞者なし

80	2
83	11
86	15
87	24
89	27
91	30
93	36
95	40
96	42
101	45
	48
	52
	55
	60
	65
	71
	76

カバー写真
東京フォトエージェンシー提供

凡 例

各作品冒頭の罫線内は、そのオー
プニング・センテンス。年齢は受
賞時のもの。本文中の☆印は前出
の続きでないことを示す。「★結
び」は終りのセンテンス。

